

## 6. まとめ

ここまで断水についての住民の対応行動の実態と意識を、仙台市と浦安市を対比する形で概観してきた。東日本大震災に伴う断水ではあったが、仙台市という「被災地広範、支援地遠方型」と、浦安市という「被災地狭小、支援地近接型」を比較してみると、水の調達、トイレ、風呂等の断水対応行動の実態と意識の両市における違いが浮き彫りになってくると予想したからだ。

今回の調査のまとめは、次の6点である。

- (1)「被災地狭小、支援地近接型」の浦安市の方が、自宅で過ごす日が短い割合が仙台市に比べ高かった。
- (2)一番止まってほしくないライフラインは両市共「電気」であった。水も入浴や調理用として使う場合、加熱が必要になる。プロパンガスの場合がいいが、都市ガスが途絶している時は電気が必要になる。今回、オール電化住宅で温かい風呂に入ることができたという回答があった。電気、上下水道、ガスの三つをライフラインとして統合的に維持しなければならないことがあらためて明確になった。
- (3)トイレや風呂は、浦安市の場合は、被災者が被災地から抜け出し、支援地の勤務先、友人や実家の家、公共施設、銭湯などを利用している例が多く見られた。また、平時は観光ホテル営業をしている施設が、災害時には風呂やトイレを提供し、支援地機能を果たす例も見られた。市域が一定の規模以上で広域災害に見舞われた場合、こうした支援地機能をどこに、どのように整備するか、大きな問題と言える。
- (4)都市においては、飲料水について井戸水や川の水など自然水利を利用する人は非常に少ない。
- (5)近所づきあいに気を配っていることと、近所から救いの手をさしのべられることとの間には、関連性がある。
- (6)回答者のほぼすべてが、「人との関わり」を活用して断水災害を乗り切った。

以上であるが、本調査の最も大きな貢献は、「3.5.断水期間中、トイレはどうしたか」「3.7.断水期間中、風呂はどうしたか」「4.1.近隣との助け合い」「4.3.どのような情報がほしいか」「5.3.今回の災害の教訓」で回答者の方に挙げて頂いた自由回答であろう。

トイレについては、「風呂の残り水をタンクに移動した」（仙台市）、「ペットシートを使用した」（浦安市）等、様々な対応が示された。風呂についても「洗髪は2～3日に1回、風呂は2週間に1回共同浴場、他は、ぬらしたタオルやウェットティッシュで拭いて我慢した」（仙台市）、「勤務先の夜勤用シャワーを使った」（浦安市）等の詳細な行動実態が明らかになってきた。これらは断水、あるいは電気、ガス途絶がいつまで続くかわからない不安感の中でとられた行動である。そのための貴重な物資情報などは近隣の口コミから得られ、断水に応じた工夫が助け合いの中で広がったこともよくわかる。

これら結果を総合すると、災害の備えとして最も大事なことは「人とのつながり」であることを、断水災害でも確認させられた。回答者の多くが、親類、知人は言うに及ばず、友人、近隣、さらには職場の人々など、様々な人間関係をうまく利用して断水災害を乗り切ったことが明らかになっている。防災ないしは災害回復の観点から、これら「人とのつながり」を意図して構築していくことの重要さが、断水対応調査を通して明確になった

と言える。

本調査で得られた断水対応への具体的な知恵は、災害による断水対策の教訓として伝えるべきだと、ミツカン水の文化センターでは確信している。本調査にご協力いただいた被災地の皆様に御礼申し上げますと共に、断水被害を受けた際に少しでもこの調査結果を役立てていただければ幸いである。

以上